

試験開始の指示があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。

岡山医療専門職大学 一般選抜（1次）・特待生チャレンジ試験

国語

（
100
点
60
分
）

【注意事項】

- 1 この問題冊子は、25ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
- 2 解答は、別紙の解答用紙の解答欄に記入しなさい。
- 3 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 4 不正行為について
 - ① 不正行為に対しては厳正に対処します。
 - ② 不正行為に見えるような行為が見受けられた場合は、監督者が注意します。
 - ③ 不正行為を行った場合は、その時点で受験を取りやめさせ退室させます。

第1問 次の問い（A・B）に答えよ。

A 次の問い（問1～問3）の四字熟語の空欄に入る漢字をそれぞれ①～⑤のうちから一つ選べ。

問1 前後不

- ① 画
- ② 覚
- ③ 確
- ④ 格
- ⑤ 抃

問2 狂 乱舞

- ① 喜
- ② 気
- ③ 奇
- ④ 鬼
- ⑤ 希

問3 好機 来

- ① 統
- ② 当
- ③ 投
- ④ 登
- ⑤ 到

B 次の問い（問1・問2）の言葉の表現として最も適切なものをそれぞれ①～⑤のうちから一つ選べ。

問1 開いた口が塞がらない

- ① 立腹しすぎて言葉がでない。
- ② 笑いがとまらず言葉がでない。
- ③ 驚きあきれて言葉がでない。
- ④ 感動が大きく言葉がでない。
- ⑤ 悲しみが大きく言葉がでない。

問2 味を占める

- ① うまい話があったならば、他に分けず一人で味わってしまう。
- ② 味わったおいしさを忘れられず、そのことで頭がいっぱいになる。
- ③ 優れた調味料が味を一変させるように、周囲に影響を与える。
- ④ 有名店のすぐれた料理長のように、料理の評価を一身に集める。
- ⑤ 一度味わったおいしい思いが忘れられず、次にもそれを期待する。

第2問

次の文章は、日本の「近代」社会と「近代」以降の「ポスト近代」社会を動かした要因（駆動因）を分析した上で、新たな社会としての「ロスト近代」社会について論じている。これを読んで、後の問い（問1～問6）に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落に

13の番号を付してある。

1 現代の社会、あるいはここで「ロスト近代」と呼ぶ時代は、九〇年代の中頃から出現してきた時代の新たなモードである。^(注1) バブル経済が崩壊して以降、日本の経済社会は「失われた一〇年」とか「失われた二〇年」などと言われている。もはや高度経済成長を望むことができず、停滞したシステムのなかで、経済のミニ・バブルの波に翻弄されているというのが、私たちの社会の実情であるだろう。日本経済はこれから、どんな政策によって再生することができるのか。さまざまな議論が^(注2) プッシュするなかで、経済の低迷がつづいている。

2 もはや欲望消費の増大によつては、大きな経済成長は望めそうにない。かといって、人々が勤勉に働けば経済が成長するのかもしれない、そうでもなさそうである。現代の資本主義社会は、「近代」の駆動因によつても、^A「ポスト近代」の駆動因によつても、いずれによつてもうまく発展しそうにない。私たちの社会は、新たに別の駆動因をもたなければ、大きな発展を見込むことができないようにみえる。

3 「ロスト近代」とは、さしあたって「近代」と「ポスト近代」を駆り立てていたそれぞれの要因が、いずれもその役目を果たし終えた（あるいは相対的に重要度を失った）時代であるだろう。むしろ正確に言えば、近代の駆動因である物象化も、^(注3) ポスト近代の駆動因である欲望消費も、いずれも存在している。その意味で、私たちの時代は重層的な原理で動いている。けれどもこれらの要素は、時代を動かすための動因としては、いずれもあまり見込みがない。そのような「失速感」こそが、私たちの時代を規定しているのではないだろうか。

4 とりわけ一九九〇年代中盤以降の現実として、「護送船団方式」と呼ばれる官主導の社会運営が機能しなくなってきた。^(注4) 社会があまりにも複雑になり、官主導の経済政策は、思ったほどの成果をあげることができなくなってきた。そこで政府は、さまざまな規制緩和^(注5) 政策を打ち出して、いわゆる「勝ち組」^(注6) と呼ばれる新たな富裕層に、経済成長の牽引力^(けんりょく) を期待するようになった。ときはちょうど、グローバルゼーションが話題となった時代とも重なり、「勝ち組／負け組」という格差が問題化した時期でもあった。

5 ところが自由競争のもとで、日本社会は思わぬ事態に陥った。負け組と呼ばれる低所得層の人びとは、もはやいっしょうけんめいに働いても、「努力が報われない」と感じるようになる。人びとは、「ワンランク上」を目指して努力するよりも、欲求水準そのものをクール・ダウンするようになっていく。「勤勉」に働くことが報われず、「欲望」消費の快楽を期待できないような社会になる。するともはや、富裕層による消費の拡大は、経済全体を牽引することができなくなる。自分よりもワンランク上の「勝ち組」の欲望を模倣（エミュレーション）するためには、一定の所得が必要である。ところがそのような所得が見込めないところでは、人びとはさしあたって、^B各私化された欲望を抱くようになる。欲望のエネルギーは、「勝ち組の欲望を真似する」のではなく、「自分がしたいことをする」という水準にまで、収縮してしまう。けれどもいったい「自分がしたいこと」とは、何であろうか。セレブな生活に羨望を抱かず、「自分がしたいこと」をして満足できるためには、まず自分を好きになる必要がある。「自己への愛」でもって満足する必要がある。だが自分とは、何なのか。それが分からなければ、「自分探し」の旅に出なければならぬ。けれども旅に出るだけの余裕がなければ、人々はさしあたって、ネット上に「自己の快楽」を求める主体へと向かうのではないだろうか。

6 実際、人びとは、ネットを通じた情報消費によって、^{蛇壺}化^{（注7）}した選好を抱くようになっていった。インターネットやスマートフォンなどに、一か月の定額基本通信料を支払ってしまえば、私たちは自身の欲望を、さらなる資本の論理と結びつける必要がない。基本料金を支払ってしまえば、あとは無料でさまざまなコンテンツを楽しむことができる。動画、音楽、ラジオ、ゲーム、等々、私たちは無料の情報を^{（イ）}キョウジュするだけで、人生を楽しむようになってきた。欲望を肥大化させて「勝ち組」のライフ・スタイルを手に入れなくても、自己愛消費によって生活する術^{（イ）}を学べば、人生を楽しむことができるようになってきた。

7 他方では、近代的な勤勉精神の喪失（ロスト）、および、ポスト近代的な欲望の喪失（ロスト）、というこの^{（注7）}「二つの「ロスト」」は、それぞれの時代における「対抗運動」の意義も失効させてしまった。「近代」においては、物象化や疎外に対抗するコミュニケーション運動が、抵抗のライフ・スタイルを導いてきた。また「ポスト近代」においては、逸脱的な欲望の表現が、抵抗の政治表現を提供してきた。ところが「ロスト近代」になると、こうした抵抗の戦略は、もはや時代に対抗するためのショウ^{（イ）}・チョウウ的意義を失っていく。これまでのような抵抗の表現は、時代の支配的な駆動因に対抗する機能を発揮できないためである。

8 「ロスト近代」の社会においては、その支配的なモードに抵抗する活動は、時代の本質的な駆動因に迫るものでなければならぬ。ではそれは、いったい何であろうか。それを見定めるためにも、私たちはこの時代の駆動因を分析しなければならない。

9 そこでまず、「ロスト近代」の背景をなす諸条件について考えてみたい。ロスト近代は、人びとがしだいに、欲望消費のバカバカしさに気づきはじめたところから生まれている。宣伝に踊らされ、欲望をかきたてられ、欲しいと思ったブランド商品を買っても飽き足らない。そんな生活のむなしさ、あるいは欲望の飽き足らなから逃れたいと感じ始めた人々は、しだいに欲望消費に巻き込まれず、自然で本来的な経験を求めるようになってきた。例えば、中高年層の登山ブーム、若者たちの古着志向、ロハスと呼ばれる自然なライフ・スタイルの探究、ユニクロや無印良品で楽しむシンプル・ライフ、もはや自動車に関心を向けず、ランニング・シューズや自転車を^(注9) コウニユウする若年層、フェアトレードへの関心、職場や学校に自前のお弁当を持参する草食系男子の出現、等々。こうした新しい生活の現象を、一つの言葉でくくることは難しい。だがそこには、共通する一つの志向、すなわち、「自然の本来的価値」への志向があるといえないだろうか。

10 私は以前、拙著『自由に生きるとはどのようなことか』のなかで、「創造階級(クリエイティブ・クラス)」と呼ばれる新しい支配階級の台頭について論じたことがある。創造階級とは、情報産業の新たな担い手たちである。彼・彼女らは、自分の欲望を満たすよりも、自分の潜在能力をできるかぎり引き出すことに、関心を示している。創造階級の人びとは、欲望消費には踊らされない。むしろ、クリエイティブな作品や商品を生み出すために、発想の源泉として、豊かな体験をすること、あるいは創造的な環境に身を置くことに、大きな関心を寄せている。創造階級の人びとが求めているのは、創造の源泉である。その源泉を手に入れるために、自然の本来的価値に触れたり、自然の多産性を身につけたりすることに、関心をもっている。

11 創造階級は、必ずしも高所得をかせぐことに成功した人たちではない。経済的に成功しなくても、クリエイティブに生きることには、十分な意義があるとみなされる。たとえば私たちは、できることなら環境にやさしい生活をしたいと思うことがある。賢く消費して、自然と融和したい。そのようなエコロジーへの関心は、高い給料を^(オ)カセグ生活よりも、むしろ想像力(イマジネーション)を豊かに発揮して、自然と調和するような生活を求めるだろう。エコロジーへの関心は、真に創造的な生活と、さまざまな点で一致する。いずれも、イマジネーションを活用してはじめて実現できるような生活なのである。

12 では、真にエコロジカルな生活とは、どんなものであろうか。それはたんに、リサイクルをしたり、有機野菜を食べたりするというのではなく、もっと自然の神秘に迫るような、脱日常的な経験を必要としているのではないだろうか。自然の神秘をつかみ取るためには、日常生活においては隠されている「自然の多産な真理」に触れなければならない。多産な自然の神秘をつかみとったときに、私た

ちはエコロジーの担い手として、精神的にも豊かに生活していくことができるのではないか。

13 自然の多産性を、自分の生き方の原理とする。そのような生き方は、創造階級だけでなく、「真の豊かさとは何か」について関心をもつすべての人々に、魅力的な理想を提供している。私たちの社会は、エコロジカルな融和のために、クリエイティブな仕方で環境と向き合うことを、一つの理想としている。^D そのような営みへの関心は、資本主義の原理を、新たに動かす駆動因となりうるのではないだろうか。

(橋本努^{はしもとつとむ}『ロスト近代——資本主義の新たな駆動因』による)

(注)

- 1 モード——様式、形式。この文章では時代のありようのこと。
- 2 欲望消費——筆者の造語。人々が、必要の有無にかかわらずブランド商品や自動車などを次々に求めるように、飽き足りない欲望を満たそうとする消費活動。
- 3 物象化——人間の能力や人間関係が商品とみなされたり、貨幣で測られたりして物のように扱われる事態。この文章ではさらに、人びとがその扱いに応じて機械のように勤勉に働き、社会に富を蓄積する現象までを含む。
- 4 護送船団方式——行政が特定の産業を保護し、業界全体の収益力を高める産業政策。
- 5 規制緩和——行政が行う許認可制度を見直して民間の経済活動を活性化しようとする動き。
- 6 勝ち組——経済的に新たに二極化した社会的階層の上位層。その下位層が「負け組」とされる。
- 7 疎外——この文章では、貨幣経済の中で、人間が自分の活動の産物によって支配され、人間らしさを失う状況を指す。物象化と並行して発生する。
- 8 コミュニーン運動——共通の思想や文化を持つ人びとの生活共同体が、資本主義社会の問題に対抗するために行う社会的運動。
- 9 フェアトレード——開発途上国の原料や製品を公正な価格で買い入れる仕組み。

問1 傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) フンシユツ

- ① ギフンにかられる
- ② 国境でフンソウが起きる
- ③ 消毒液をフンムする
- ④ コウフンして眠れない
- ⑤ フンシヨク決算を指摘する

(イ) キヨウジュ

- ① 齒並びをキヨウセイする
- ② 国王にキヨウジュンの意を示す
- ③ キヨウイ的な記録を残す
- ④ キヨウラク的な人生を送る
- ⑤ 敵のキヨウイにさらされる

(ウ) ショウチヨウ

- ① 助走をつけてチヨウヤクする
- ② 税金をチヨウシュウする
- ③ 時代をチヨウエツする
- ④ チヨウカイ処分を受ける
- ⑤ 美術館でチヨウコクを見る

(エ) コウニユウ

- ① 雑誌を定期コウドクする
- ② 売り上げにコウケンする
- ③ コウキを肅正する
- ④ ゲンコウ用紙を配る
- ⑤ コウカを鑄造する

(オ) カセぐ

① 責任をテンカする

③ 機械がカドウする

⑤ 競争がカレッツを極める

② カクウの話をする

④ もめごとのカチユウに入る

問2 傍線部A「『ポスト近代』」とあるが、本文中の「ポスト近代」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 停滞した経済システムの中でも勤労精神を失わなかった人びとに突発的に訪れた小規模な好景気が、経済全体を牽引した時代。
- ② 勤勉に働くことが日本経済のめざましい成長につながると信じた人びとによる勤労所得の著しい増大が、経済全体を牽引した時代。
- ③ 複雑化した社会に対する国家主導の経済政策が十全に機能しなくなり、代わりに市場に任せる規制緩和政策の効果が、経済全体を牽引した時代。
- ④ 産業構造の変化と発展に伴い、広告などの情報に操られた人びとによる快楽に満ちた旺盛な消費欲の肥大が、経済全体を牽引した時代。
- ⑤ 人びとの中産階級意識は薄れつつも、「勝ち組」と呼ばれる一部の富裕層の消費行動を模倣した個人消費が、経済全体を牽引した時代。

問3

傍線部B「各私化された欲望を抱くようになる」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① グローバリゼーションの急速な拡大から、個人が目前の社会や他者との関わりを放棄して、潜在的な欲望を充足させる情報の消費によって人生を楽しむ術を身につけはじめるようになること。
- ② 経済成長の停滞の下で、労働による生活の上昇にも消費の欲望にも幻滅を覚え、自分が本来したいことは何かという水準にまで欲望のエネルギーを縮小させ、自己の探究へと向かうようになること。
- ③ 日本経済の低迷に伴って、自分のできることは何かという先行きへの不安が広がり、競争原理に巻き込まれまいとして自分探しに力を入れ、結局自己中心的な消費にはまり込むようになること。
- ④ 欲望に流されがちな個人のあり方への反省から、自分の創造的な力を引き出し、日常において隠されていた自然につながる生活を追い求め、多種多様な行動に自由にいそしむようになること。
- ⑤ 情報技術が高度に進化して個人がネットに接続できるようになり、現実ではなくメディアが提供する無料コンテンツの中に快楽を求めて、自己の欲望を満たしはじめるようになること。

問4

傍線部C「二つの『ロスト』」とあるが、次に示されているのは、この文章を読んだ五人の生徒が「ロスト」の内容について話し合っている場面である。本文の趣旨に最も近い発言を次の①～⑤のうちから一つ選べ。

① 生徒A——こつこつと真面目に働いても所得が変わらないために、勤勉に働けば自分が幸せになれるということを信じられなくなってきた。それに、自分よりワランク上の人たちを真似したいという欲望もなくなってきた。そういう人が目立ってきたことがこの文章の「二つの『ロスト』」ってことなんだよね。

② 生徒B——勤勉の方はそのとおりだと思うけど、欲望の方は、物象化に抵抗して人間性を保ちつづけたという欲望のことなんじゃないかな。そういう欲望が薄れてきていることと、勤勉に働くことを重要だと思わなくなってきたことを併せて「二つの『ロスト』」っていつているんじゃないの。

③ 生徒C——いや、4段落で官主導の経済政策が成果をあげられなくなったことに触れているでしょ、だから、政府のために努力しても仕方がないし、昇進して高い地位を得たいとも思わなくなってきた。そういう人が多くなって、経済の低迷がつづいていることを、ここで「二つの『ロスト』」と呼んでいるんじゃないかな。

④ 生徒D——そうかなあ。むしろ規制緩和と政策の中で勤勉な富裕層に経済を牽引することを期待したけど効果が出ないし、人びとの欲望を刺激しても消費が伸びていかない。そういうふうに、政策的にも経済的にも見込みがなくなっていることが「二つの『ロスト』」だと思うよ。

⑤ 生徒E——たしかに、欲望のままに消費するのはバカバカしいし、それに、勤勉に働いても報われない。そんなふうに考える人が多くなっているので、欲望と勤勉さのどっちも経済を成長させる重要な要因でなくなった。そんな状況をここでは「二つの『ロスト』」と表現しているんじゃないかな。

問5

傍線部D「そのような営みへの関心は、資本主義の原理を、新たに動かす駆動因となりうるのではないだろうか。」とあるが、どうしてそのように考えられるのか。その理由として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 「ロスト近代」の人びとは、際限のない消費を捨て自然との融和を志向する創造階級として社会で台頭したいという階層意識をもっている。エコロジーに関心を持つそのような大衆の出現は、新たな消費活動を生むとともに生産の拡大をもたらし、この時代の経済を動かしていく要因になるから。
- ② 「ロスト近代」の人びとは、クリエイティブな仕方で環境と向き合うことを自分の生き方の原理にし、経済的に成功して高所得をかせぐことを拒否して自然と調和した生活環境を求める中で、これまでと異なる新たな消費を生みつつある。その動きがこの時代の経済を動かしていく要因になるから。
- ③ 「ロスト近代」の人びとは、宣伝に踊らされるのではなく自身の可能性を高めるための本来的な経験を求め、日常の中でイメージネーションを活用して自然と調和することに価値を置く傾向がある。その価値観に基づく新たな消費活動の広がりが、これからの経済を動かしていく要因になるから。
- ④ 「ロスト近代」の人びとは、真にエコロジカルな生活とはリサイクルをしたり有機野菜を食べたりすることだと考えており、そのような自然との融和によって精神的に豊かな生活を送る機会を増やしつつある。その流行が新たな消費を生み、これからの経済を動かしていく要因になるから。
- ⑤ 「ロスト近代」の人びとは、情報産業の担い手としてクリエイティブに生きることの意義を見いだす創造階級にあこがれ、自分も同じような生き方を目指すことを目指している。その強いあこがれは、新たな欲望と消費を生みきつかけとなり、この時代の経済を動かしていく要因になるから。

問6

この文章の構成・展開の説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

- | | | | |
|---|----|----|---|
| ① | 第1 | 3 | 段落の範囲では、この文章の論点について、概要を説明しつつ提示している。 |
| ② | 第1 | 3 | 段落の範囲では、この文章の論点と、それに対する文章全体の主張を提示している。 |
| ③ | 第5 | 8 | 段落の範囲では、この文章の論点について、具体例の提示や別の角度からの考察により詳述している。 |
| ④ | 第5 | 8 | 段落の範囲では、この文章の論点について説明を加えた上で、この文章全体の問題提起を行っている。 |
| ⑤ | 第9 | 13 | 段落の範囲では、具体例を考察してこの文章の主張を抽出し、その主張の妥当性について論じている。 |
| ⑥ | 第9 | 13 | 段落の範囲では、具体例に言及した上で前著での主張を引用し、この文章の主張と対比して論じている。 |

第3問

次の文章は、中野孝次「鳥屋の日々」（一九七七年発表）の一節で、昭和初期の千葉県市川市が舞台である。義務教育終了間近の小学校六年生のクラスは、進学をめぐつて険悪な雰囲気が生まれていた。成績優秀だった「ぼく」は進学を希望していたが、父に話せずにいたところ、担任の林田先生が家を訪ねてきた。以下はその後の場面である。これを読んで、後の問い（問1～問6）に答えよ。

やがておそろおそろ路地から家をのぞくと、林田先生の姿はもうなくて、母が何やら気落ちしたふうで後片付けをしていた。「妹や弟たちも戻ってきていた。母はぼくを見ても何も言わなかった。父は長火鉢の前で帳付けしていた。」「もう帰ったの。」「ああ、いまお帰りになったよ」と、母の答も上の空だ。それから父が咳ばらいして立ち上って近付いた。ぼくが何か言われるなと身構えていると、父はだまって縁側から草履に足をおろし、履いて歩きだしながら、「中学なんか、やるわけにいかねえぞ」と、ぼくの顔も見ずに言いわたした。

わが家では、親子の対話どころか、親と子が面と向って何かを話しあうという習慣さえなかった。言葉であれこれと検討したり言いあうことを面倒がる職人気質からか、ともかく一番大事な決定は、出て行きがしらに短く一方的に宣告されるだけだった。ただしこの一度言われたことは絶対的で、間違っても何でも変更されることがなかったが。母などはだから父に言われるとどんなに不満であっても黙って服従した。ぼくはそれを知っていたが、このときは、今をはずしたらだめだと必死の思いで、「なぜだよ、なぜだめなんだよ」と叫んだ。叫ぶというその行為だけで、父の背中に浴びせた声はもう半分涙声になっていた。

父は一瞬立ち止ったが、向うをむいたまま、「だめだったらだめだ」と断定的に言い放って、そのまま仕事場にいつてしまった。

「先生もね」と母がとりなし顔に言った。「おまえを中学にやるようにって、言いに来てくれたんだけどね。」

「じゃ、なぜウンって言うてくれなかったんだよ。やだ、ぼくだけ中学にいけないなんて、やだっ。」

「父ちゃんはね、職人の子に教育なんかいらなくて言うんだよ。それで先生と言いたいになっちゃって、先生にも悪いことしちゃったけど、なまじ学問があると生意気になっていけねえって、それ一本槍で。父ちゃんはあのとおり一刻者で、言いだしたらききっこないんだから。」

「やだっ、じゃ貧乏人の子は一生貧乏でいろっというのか、うそだ、そんなことはうそだっ。」

「無理言うんじゃないよ。上の兄ちゃんだつて一番だったのに、高等科でおえてるんだからね。おまえだけ中学にやったら兄ちゃんが可哀相じゃないか。それくらいの理窟はおまえだつてわかるだろ。」

「中学にいけないなら死んだほうがましだ。」

「じゃ勝手におし。これだけ言ってもわかんないんなら、母ちゃんだつて知らないよ。よそへいくなりなんなり、どこへでもいいって自分で好きにやるがいい。」

母にまでこうすげなく見離されては、どこといつて頼るところのあるわけがない。妹や弟が脅えたふうに見守る前で、最初の一粒がはつれ落ちると、涙はあとからあとからきりもなく溢れ出た。ぼくは蹠蹠と家をはなれ、どこにいつても知った顔があるので、また江戸川の土手まで来ていた。よく晴れた日だった。斜面にしゃがみこんで、なにが「分相応」だ、なにが「高のぞみ」だと、父と母の言葉を思い浮かべて二人を呪った。こんなつらい目にあうくらいならいっそ生れてこなければよかった、なんでこんな家に生れて来たんだろう。土手の枯草にしゃがみこんで、そんなことを思いながらうちひしがれた目をみひらいていると、前をオワイ船の列を従えたポンポン蒸気がまたゆっくりにゆっくりに河を下ってゆく。江戸川はいつもと少しも変りなく、下から下から水を盛りあげながら、不透明な灰緑色に流れている。向う岸のひろい葦の原は風がくるたびに大きくうねりながらうごいていた。それはぼくが生れて以来見つづけてきたあきあきするほどなれ親しんだ景色だった。だが今は、自分の腹の底にすぼつと穴でもあいたような具合で、力が抜けて、その親しい眺めと自分との関係さえ断ち切れてしまったような気がする。須藤や級長の大木や顔も思い出され、かれらと自分のあいだにいまはつきりとどうしようもない線が引かれてしまったのをぼくは感じていた。

ぼくは本当は父が好きだったんだと思う。(注3) 五つの子が三キロも離れた仕事場まで一人で歩いていったなんて、その子の放浪癖や家嫌いを考慮に入れても、父への愛着ぬきには考えられない。父は傲慢で無教養で暴力的だったが、十歳のぼくは、その父と田舎へ行くのが嬉しかった。彼が人間関係におけるある種の無器用さから、口数乏しくただ生身の自分をそこにつつ立たしておく、おれが何者かはおれの仕事を見て言ってくれというように、傲然とつつ立っているのを見るのが、ぼくは好きだった。そういう父を持ったことが自慢だった。しかし彼が家長である家に生きるということは、彼が好きか嫌いかということとまったく別の問題だった。まっとうに立派な仕事だけしていれば、あとはすべて昔からの仕来りどおりに運んでいけばいいんだと父は頑なに信じて疑わぬ人だった。新興住宅地のさまざまな新しい問題をかかえた家族にたいし、父の生れた在所のやり方でおし通そうというのは、ほとんど無謀なまでに向う見ずなことだった。子供の教育一つとってみても、彼の考えは一生涯昔の明治農村の常識をこえることができなかった。兄は、気の弱い従順な孝行息子だったから、それですんだが、

ぼくが自分を生かそうと自己主張したとき、それは初めて本格的な父と子の闘争にならずにすまなかった。Ⅱしかもそれ以後一生涯双方の關係を不幸な歪んだものにしてしまったほどの。

Ⅲそれまで樂天的な、おつちよこちよいのはしやぎやだった少年が、教室でも急に陰鬱な生徒に変わった。須藤はぼくが父に進学を断られた話をする、「へええ、わからずやの親父さんだな、ぼくが頼んでやろうか」と言ったが、呑氣坊主の須藤も事態の深刻さがわかってくと、この世には進学したくても出来ない子のあることがのみこめたらしい。「がっかりするなよ、きみはできるんだもの、なんとかなるさ」と、へんな慰め方をした。だが、彼がぼくの絶望の深刻さを知ったのは、このときでなく、やがてある暴力事件が自分の身に起ったときだったに違いない。それは長いあいだ、記憶の底ににあった暗い穴として、思いだすたびにいても立ってもいられないような氣持にさせた出来事なのだ。というのは、ぼくがほかならぬその須藤をいきなり殴りつけたのだ。

冬に近いある日の午後、掃除当番をおえてもう進学組とともに居残らずに外に出てくると、校庭の真中に立つプラタナスの巨木のそばに須藤が一人で立っているのが目に入った。^(注6)御眞影奉安所に背をむけて、色白のひろい額をまっすぐ鉄棒にむけて、なにか緊張した面持ちで砂場に立っていた。彼一人きりだった。須藤はクラスでただ一人大車輪をやつてのける生徒だったから、いま進学組として掃除の終るのを待つあいだその練習をしていたらしいことが、すぐわかった。須藤は呑氣坊主だが、あることに熱中すると、端正な面長の顔にきりつとした氣配が流れて、そういうときの彼は実にいい顔をしていた。いまも彼はそういう表情をみせて、人気のない雨天体操場の暗くしずまったガラス戸の前に立っている。そういう彼を見ているうち、突然なにか狂暴な、わけのわからぬものがうちに衝きあげてきて、ぼくは「やみくもに」須藤めがけてつかつかっていった。突進していった全身の力で須藤をつき倒し、のしかかり、殴りつけた。自分でもどうしてそんなことをしたのかわからずに、ただ、いま自分はなにか非常に卑怯な、浅ましいことをしているのだと自覚しながら、泣きながら須藤を殴りつづけた。彼は何が起ったのかわからず手をあげて防戦一方だったが、相手がほかならぬぼくだと知ると、一瞬ぎよつとしたような顔になって、それから「こいつ」と叫び、ふだんおとなしい彼に似ぬはげしきで反撃してきた。そこには裏切られた少年の本当の怒りがあった。ぼくはたちまち逆に組み伏せられ、砂まみれになって殴ったり殴られたりしつづけた。須藤はしかしひとしきり殴りつづけると、急にやめ、立ちあがって、なんともいえぬ表情をしてこつちを見て、むこうへ歩いていった。ぼくは泣きじやくりながら起きあがり、砂まみれの顔を袖でぬぐいぬぐい、彼と反対の裏門のほうのろろ歩きだした。自分のしたことがどんなに理不尽なひどい行為かは自分でもよくわかっていた。それだけに、なおかつそんなことをせずにいられなかった自分がみじめで、やりきれなかった。二人は絵でも作文でも小説好きの点でも、いつも

同じことをしてきた、分身といってもいい仲間だった。須藤を殴るのはまるで自分を殴るのと同じことだったのだ。それだけに、ああこれで何も彼も終りだと思い、^{IV} ぼくはいっそう暗い気持ちに沈んだ。

昭和十一年秋、父は須和田に初めて自分の家を建てることができた。木下家が屋敷を建てた当時は農家と地元の酒屋・雑貨屋・自転車屋ぐらしいしかなかった、田舎いなかしていた^{あたり}辺が、数年のあいだに急に新興住宅地に変わりかけていた。新しい家は裏に一面の麦畑をひかえ、明るく、せいせいしていて、国府台街道下の西日のすぐかげる暗い長屋から来た目をたのしませた。麦の穂の出るころには、風に乗って麦のにおいが家の中まで漂ってきた。近所の人の顔ぶれも職業も変った。ほとんどが朝ごとに子供を抱いた妻に見送られて駅へ急ぐサラリーマン家庭で、ここでは細君たちはたがいに「奥さん」と呼びあっていた。根本の家のころは「おかみさん」と呼ばれていた母までが急に「奥さん」に変わり、髪の手入れをしたり、身なりに気をつけだして、白いエプロン姿に変ったのが、くすぐったいようだった。

父は四十代なかばで、生涯の一番いい時期にさしかかっていた。新しい家の仕事場には切れ目なしに新材が積み上げられ、いつも数人の職人が通いで働いていた。引越した翌年七月に蘆溝橋事件^{ろうこうきょう}が起った。職人たちは連日新聞が伝える皇軍^{（注7）}の進撃ぶりを茶のみ話にして、かれらの威勢のいい無責任な話までがうちの景気の伴奏をしているようだった。父は機嫌がよかった。軍需景気という言葉が当時あったかどうか、ともかく戦争にともなうサラリーマン層の増大が、彼をながいあいだの貧困から救いだす結果になったのは間違いない。近くに次から次へ貸家が新築され、それは建つそばからすぐふさがっていった。^V 裏の麦畑も一年後には新しい住宅群に蚕食されていった。

ぼくは元の小学校の高等科に通いだしていた。校長室に向いあった二階の北側の教室に集められた男女生徒四十人ばかりは、商家や職人や農家の子弟がほとんどで、仕方なしにここへ来ているという諦めと一種の人懐っこさが共通していた。教室で一番熱心に教えられるのはソロバンで、来る日も来る日も「V ゴハサンデネガイマシテハ」の声だけが真剣にくりかえされた。一年後には、ぼくをふくめて、クラスの大半が珠算の二級試験に合格したのだから、かなり程度の高い実業教育だったと言っている。そこへ、毎朝職人がくるころ弁当を入れたカバンを肩にさげて、真間川を渡り、吹きつさらしの田圃道^{たんぼ}を越え、真間の黒板塀と松林の三業地^{（注8）}をぬけて通った。夕方うす暗くなって帰るころは、打水^{うみず}した料亭の門先に塩が三つまみ盛りあげられていて、抜きえもんして襟首を白く浮き立たせた芸者が黒いお座敷着のつまを持ちあげて入ってゆく姿が見られた。学校への行き帰りにもぼくは表通りを避け、裏通りを選んで通っていた。ああ、おれは一番したいことをしていないでいる、という思いがいつもあった。意識の底にたえずしこりのようにそんな思いがあつて、将来自分が何をしたいのかはわからないけれども、四つ玉ソロバンに夢中で指を走らせているあいだもこれは自分が本当にしたいことじゃないと感じながら、先生がしまいには声

をからして読みあげる数字を指で追っていた。きみたちが世の中に出るには、ソロバンをしつかり身につけなければだめだ、と越川先生はいつも言っていた。こわい顔をした長身の先生は、須和田の家の奥のほうに最近越してきた人で、先生が中学にいけなかった生徒たちに社会有用の技術を身につけさせようとしている熱意は、無気力な生徒全員の心にしみた。ソロバンを中心にしてクラスには肌をよせあう敗残兵のような空気があり、ぼくは生ぬるい湯につかるようにその空気になじんでいった。

(注)

- 1 中学——当時の学校制度で小学校の義務教育を終えた男子が進学する学校。上級学校への進学を主目的とするエリート養成機関という側面があった。
- 2 高等科——当時の学校制度で小学校の上に設置され、義務教育終了後に引き続き初等教育を施した学校のこと。その進学者は、将来の進路が中学進学者と大きく異なった。
- 3 蹣跚と——よろめくように。ふらふらとしながら。
- 4 オワイ船の列を従えたポンポン蒸気——オワイ船は糞尿などを積んで運ぶ船。ポンポン蒸気は、ぼんぼんとエンジン音をたてて走る小さな船。
- 5 五つの子が三キロも離れた仕事場まで一人で歩いていった——「ぼく」の幼少期の記憶として、父の仕事場（「昭和十一年秋、父は」の行に出てくる木下家の建築現場）に一人で歩いて行ったことが、本文より前の場面に記されている。
- 6 御真影奉安所——天皇・皇后の写真（御真影）を安置してある場所。当時、ほぼすべての学校に存在した。
- 7 皇軍——当時の日本の軍隊を指す呼称の一つ。
- 8 三業地——かつて、料理屋などの営業が許可された場所。
- 9 抜きえもん——和服の着方の一つ。胸元の合わせ目（衣紋）を押し上げて後ろ襟を引き下げ、首筋がのぞくようにしたもの。

問1 傍線部(ア)～(ウ)の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(ア) すぎなく

- | | | |
|----------|----------|--------|
| ① 冷淡に | ② なすすべなく | ③ 一方的に |
| ④ 思いがけなく | ⑤ 嫌味っぽく | |

(イ) うちひしがれた

- | | |
|----------------|---------------|
| ① 不満が収まらず恨むような | ② 疲れ切ってしょぼくれた |
| ③ 気が動転してうろたえた | ④ 氣力を失ってうつろな |
| ⑤ しょげ返って涙にうるんだ | |

(ウ) やみくもに

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| ① 不意について | ② 敵意をあらわに | ③ やむにやまれず |
| ④ 前後の見境なく | ⑤ 目標を見据えて | |

問2

傍線部A「その親しい眺めと自分との関係さえ断ち切れてしまったような気がする」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 中学校への進学が許されず、父ばかりではなく母にも理解を得られなかったことによって、深くなじんだ当たり前の世界とのつながりまでが失われてしまったように感じているということ。
- ② 中学校への進学が許されず、死を意識するほど悲しんでいるのに、自分に寄り添ってくれると思っていた風景までもがいつもと変わらないでいることにうらめしさを感じているということ。
- ③ 中学校への進学が許されず、誰かの力を借りることも望めなくなったために、いつも元気づけてくれていた景色までもが自分を見離してしまっているかのように感じているということ。
- ④ 中学校への進学が許されず、親にも理解されない自分の生い立ちのみじめさを悲観しているため、生まれた時からそこにある光景への慕わしさそのもので疎ましく感じているということ。
- ⑤ 中学校への進学が許されず、自分の希望を受け入れてもらえない境遇に絶望したことにより、自分を取り巻いてきた環境への親近感や甘えの気持ちまで捨て去ろうと感じているということ。

問3

傍線部B「ぼくは本当は父が好きだったんだと思う。」とあるが、この一文にあらわれた「ぼく」の心情はどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 暴力的で融通が利かない父に対し不満な気持ちを抱いてきた。しかし、その背後に打ち消しきれない好意があったことにも気づいており、ようやくその感情に素直になることができている。
- ② ひそかに自慢に思っていた職人氣質の父と本当は理解し合いたいと思ってきた。しかし、自分の希望に耳を貸さなかったことが忘れられず、今でも父への愛情を手放しに認められずにいる。
- ③ 先生の話も聞かず自分の進学を認めなかった父をいまだに許容できずにいた。しかし、少年時より職人としての父へのあこがれもあり、今もお捨てきれない親愛の情をもてあましている。
- ④ 自分の希望を理解しようとしめない父に強い反発心を抱いてきた。しかし、その底には職人氣質の父を誇りに思う心情が潜んでおり、そのことをためらいながらもあらためて確認している。
- ⑤ 進学についての意見の相違によって父との対立は修復できないものになったと感じてきた。しかし、無邪気に愛情を示していた頃を思い出し、もう和解すべきだと自分に言い聞かせている。

問4

傍線部C「須藤を殴るのはまるで自分を殴るのと同じことだったのだ。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① のびのびと鉄棒の練習をしていた須藤の姿は、快活だった過去の自分を思い出させるものだった。須藤を殴る行為は、暗い性格に変わった自分が今後沈んだ気持ちのまま生きていくことを決定的にしよう行為だったということ。
- ② 真剣な様子で鉄棒の練習をしていた須藤の姿は、自分と重なる存在だった彼との距離を強く意識させるものだった。須藤を殴る行為は、大切な二人の関係を修復できなくすること、自分を孤独に追い込む行為だったということ。
- ③ 一人きりで鉄棒の練習をしていた須藤の姿は、自分がなりたかった存在を痛切に感じさせるものだった。須藤を殴る行為は、理想に到達できなくなったという絶望感がひきおこした、自分自身を激しく否定する行為だったということ。
- ④ 目立つ場所で鉄棒の練習をしていた須藤の姿は、苦労なく進学できる呑気さのあらわれに思えるものだった。須藤を殴る行為は、彼への反発とともに、状況を変えられないから立ちから出た自分を傷つける行為でもあったということ。
- ⑤ 掃除もせずに鉄棒の練習をしていた須藤の姿は、「ぼく」の心情を考慮しない、自分への裏切りといえる無神経なものだった。須藤を殴る行為は、彼を心から信頼していた自分自身への怒りのあらわれとしての行為だったということ。

問5

傍線部D「ぼくは生ぬるい湯につかるようにその空気になじんでいた」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① くりかえされるソロバンの授業は、世に出るための質の高い実業教育だということを生徒も感じ始めていた。かつては中学への進学に対して強い情熱を持っていた「ぼく」も、二級試験に合格するくらいソロバンに習熟し、そこに将来の可能性を漠然とながら感じ始めていったということ。
- ② 中学に行けなかったという傷を抱えた生徒たちは、抜け殻のようになれ合いの生活を送っていた。かつては中学への進学に対して強い情熱を持っていた「ぼく」も、現実社会と向き合えずに、自分は将来何になれるかなどを中途半端な気持ちのまま空想するこ
とが増えていったということ。
- ③ 熱意あるソロバンの授業は、進学を諦めた生徒が希望を喪失することをかろうじて防ぎ、なぐさめ合うような連帯感を生んでいた。かつては中学への進学に対して強い情熱を持っていた「ぼく」も、進学を断念したときの思いが薄れ、充実感に乏しい現状と
れ合うようになっていったということ。
- ④ 進学の道が閉ざされてむなしく過ごす生徒たちは、社会で活躍する将来を思い描けない中途半端な生活を送っていた。かつては
中学への進学に対して強い情熱を持っていた「ぼく」は、志望を変更して高等科に通っているという羞恥心から、人目を避けるよう
な生活が日常になっていったということ。
- ⑤ 質の高いソロバンの授業に影響されて、中学に行けなかった生徒たちは希望を見出し始めていた。かつては中学への進学に対し
て強い情熱を持っていた「ぼく」も、軍需景気で活気づく社会に鼓舞されるように、実業教育を中心にした毎日の生活に居心地の良
さを覚え始めていったということ。

問6

この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。

- ① 傍線部Ⅰ「妹や弟たちも戻ってきていた。母はぼくを見ても何も言わなかった。父は長火鉢の前で帳付けしていた。」は、短い文の連続によって「ぼく」の意識が妹、弟、母、父へと移っていることを示し、その場の状況をうかがう「ぼく」の様子を伝えている。
- ② 傍線部Bから傍線部Ⅳまでは、具体的な会話や風景描写の少ない説明的な文章が続いた後、須藤に対する暴力事件のことが具体的な描写や心情の記述を伴って詳しく描かれる。このような記述は、事件が「ぼく」にとって特別な出来事であったことを示している。
- ③ 傍線部Ⅱ「しかもそれ以後一生涯双方の関係を不幸な歪んだものにしてしまったほどの。」は、文を途中で中止して後を省略することによって、父との関係を振り返る「ぼく」の思いを、余韻を残しながら印象づけている。
- ④ 傍線部Ⅲ「それまで楽天的な、おちよこちよいのはしやぎやだった少年が、教室でも急に陰鬱な生徒に変わった。」は、自らのことを「少年」「生徒」という言葉で示すことによって当時の自分を対象化し、陰鬱となった理由を分析しようとしている表現である。
- ⑤ 傍線部Ⅴ「裏の麦畑も一年後には新しい住宅群に蚕食されていった。」では、住宅建設で近所の自然が徐々に破壊されていくことへの「ぼく」の危機感が、蚕が桑の葉を端から少しずつむしり込んでいく視覚イメージによってたとえられている。
- ⑥ 傍線部Ⅵでカタカナ書きされた「ゴハサンデネガイマシテハ」は、「ぼく」がこの声を、その意味を意識するよりも単なる音の連続として捉えていることを示しており、日々くりかえされる授業の単調さを印象づける効果を持っている。